

講 演

オスカー・ワイルドとアメリカ

貝 嶋 崇

(比治山大学大学院助教授)

1881年のクリスマスイブにアリゾナ号でイギリスを出帆したワイルドは、翌年の1月2日にニューヨークに到着した。生まれて初めての大西洋横断である。

1. 出発以前

ワイルドがイギリス本国を離れ外国へ出るといことは、そう度々あることではなかった。アメリカへ行く以前には、大きな外国旅行は二度しか経験していない。最初は、1875年6月のイタリア旅行であり、二度目は、1877年のローマを經由してのギリシャ旅行である。この二つの旅行から『ラヴェンナ』という詩の着想を得た。この詩でワイルドはニューディゲート賞を獲得するという栄誉を得る。この受賞で、彼が自らを天才と呼ぶだけの大きな自信をつけたといことは、想像に難くない。

しかし、こうした学生時代の輝かしい成績にもかかわらず、ワイルドの就職活動ははかばかしくなかった。イートン校のオスカー・ブラウニング(1837—1923)宛に教師の口を依頼する書簡がある。だが、それも失敗に終わる。学生時代の彼の教師に対する横柄な態度も原因の一つとも考えられるが、そうした態度は天才の気質から生じたものとも考えられる。結局彼の自尊心は傷つくことになる。さらに、その時期、同居していた友人のフランク・マイルズ(1852—1891)が1880年にターナー賞を受賞する。挫折感と友人への嫉妬から、それまで以上にワイルドは、世間の注目を浴びる必要があった。

2. 『ペイシャンス』

1881年の4月23日にオペラ・コミック座で初演された『ペイシャンス』はギルバート(1836—1911)とサリバン(1842—1900)のオペレッタである。そのオリジナルは、ギルバートのバブ・バラッドの一つである「ライバルの牧師補」(1867)だと言われている。『ペイシャンス』では登場人物の職業が牧師補から詩人へと変更された。『ペイシャンス』は田舎娘のペイシャンスをめぐる唯美主義の詩人であるバンソーンとペイシャンスの幼なじみのグローブナーが恋の争いをするという縦糸を軸に、唯美主義に対する痛烈な皮肉を横糸に織り込んだオペレッタである。興行主のリチャード・ドイリー・カート(1844—1901)はこのアメリカ公演に先立てて、唯美主義者のいないアメリカへその宣伝もかねてワイルドの50回の講演を企画したのである。ワイルドは自作の劇『ヴェラ』ロンドン初演

を待って来年まで出発を延ばしたいと条件をつけたが、アレキサンドル二世の暗殺事件のためロシアを扱ったこの劇は上演できなくなった。経済的に見通しが立たなくなり、ワイルドはアメリカへ向かうことになる。しかし、ワイルドの講演の目的はそれだけではなかった。他にも、彼の目的はイギリスの伝統に裏打ちされた独特の芸術論を披露することにあった。これは、彼の準備した講演原稿からも明らかである。

3. アメリカ上陸

1882年の1月2日に、ニューヨークへ到着したときに、税関で「自分の天才以外に持ち込みを申告するものはありません」と言ったと伝えられている。その一週間後からワイルドは講演を始める。チックリングホールでの最初の演題は「イギリスのルネッサンス」だった。15世紀のイタリアルルネッサンスにちなんで、当時のイギリスの芸術をイギリスのルネッサンスと命名し、ヘレニズムの精神とロマン主義を対比し論じたアカデミックな講演だった。だから、聴衆の中には、彼らが期待したものと違って、退屈で不満を覚えたものも多かっただろう。しかし、天性の語りの巧さで多くの人を魅了し、とても好評だったと伝えられている。その後10月までに、約140回の講演を行ない、その年の12月27日ボスニア号でリバプールへ戻る。その間に、最も影響を受けたという詩人の一人であるホイットマンにも会うことができた。それから、1883年にも二ヶ月間ほどアメリカへ「ヴェラ」の公演のために渡る。これがワイルドのアメリカ旅行の概略である。

4. バンソーンの仮面

この講演旅行でワイルドは、富を築きそして有名にもなった。また、講演旅行の際に、時として、スベランツァの息子として紹介され温かいもてなしを受けたことから、母親の影響力の大きさを肌身に感じるとともに、自分がアイルランド人であるというアイデンティティを強く意識したと思われる。しかし、講演旅行がワイルドにもたらしたものは、それだけではなかった。

彼が自ら宣伝を引き受けた『ベイヤンス』に出てくるバンソーンの仮面を身につける快樂とその悲惨をワイルドは味わうことになるのだ。アメリカ講演の前は仮面についてワイルドはあまり意識していなかった。その証拠に、『ヴェラ』の中で、「仮面」という言葉は文字どおりの仮面の意味でしか用いられないが、アメリカ講演以後の作品中では、外見をだます手段として比喩的に用いられている。特に『獄中記』では「仮面を欲するものはそれを身につけなければならない」と語っている。

『ドリァングレイの肖像画』では、ヘンリー卿の生き方にあこがれ、その仮面を身につけたドリァンの悲劇を描く。仮面が脱げなくなった悲劇だ。ワイルドはこのアメリカ講演旅行でバンソーンの仮面を生涯かぶることになった。